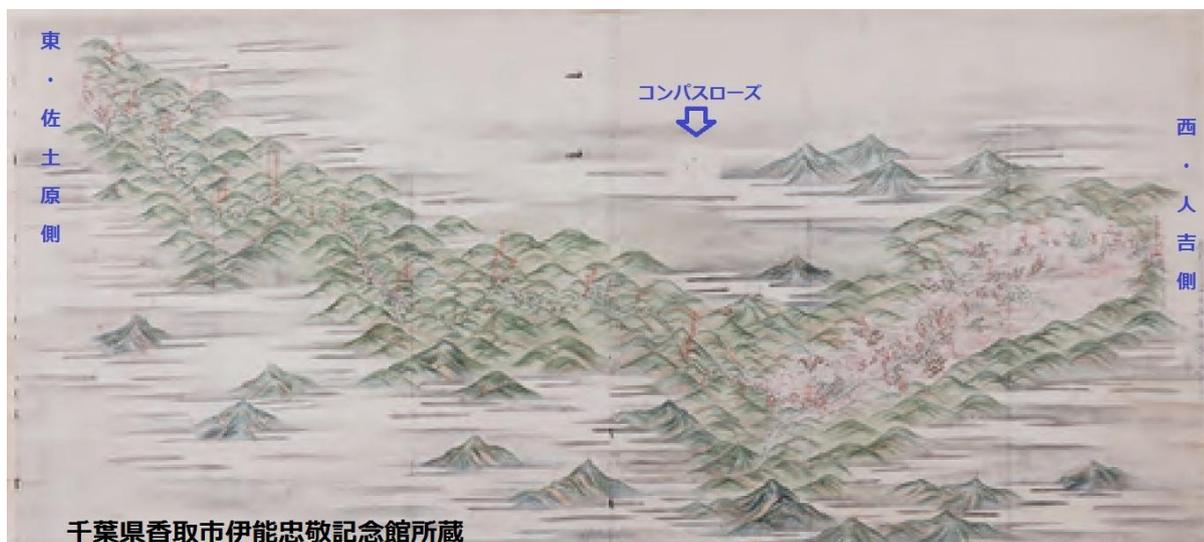


展示品一覧

- 「自肥後国球磨郡七地村至日向国宮崎郡南方村図」 文化12年 縮尺36,000分の1 81cm×177cm
国宝：地図・絵図類 番号123



本図は、熊本県の人吉郊外の七地村から宮崎県の佐土原の手前の南方村までの米良街道を描いている。この大図は本来は無題であり、平成13(2001)年に、横浜市の藤岡健夫氏から当時の佐原市に寄贈されたものである。藤岡家は、戦前に伊能家三郎右衛門家の娘が2代にわたって嫁いだ家で、そのとき伊能家から持参した大図である。『伊能忠敬研究』第26号にその経緯が記されている。この大図については、『伊能忠敬研究』第11号で渡辺一郎氏が詳しく解説されているので、拙文は蛇足にすぎない。

第8次(九州第2次)測量で、屋久島、種子島測量を終えた後、坂部支隊は文化9(1812)年6月6日に人吉城下を出発し、米良街道を東に向かい、13日に佐土原城下に到着した。『測量日記』を見ると、6月8日「一里山越という大難所」、「幅八間丸木一本橋」、9日「竹橋にて深瀬という甚だ危き橋なり」、「米良谷橋幅四十二間。割木橋幅三尺ばかり、中程は動揺」、「天包越という大難所」、10日「飛石渡幅九間」、「丸木橋幅二十七間。越野尾橋という。甚だ危し」とあるように、山越え、谷越えの難所が続いた。

赤い測線の米良街道以外は、斜め上からの山々の鳥瞰図である。周辺部は空白ではなく、大和絵特有の「すやり霞」で処理されている。このような空間処理は、伊能忠敬記念館蔵『自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第七(自成行/至小松原)』(国宝地図・絵図類21番)にも見られる。これは浜名湖北側の測量がされていない時点で作製されたため、気賀の関所や姫街道のあたりは「すやり霞」で処理されている。

また、未彩色のため分かりづらいが、本大図中央上部にはコンパスローズのスペースが在り、東西南北だけが書かれている。本図は南を上にしており東西が逆になる。また、朱書きで地名や領名が書き込まれているのも特色である。

本図の地域割りについて、神戸市立博物館蔵『伊能小図 西日本』の同じ範囲を切り取って比べてみた。本図は、アメリカ大図の第200号、第197号、第185号にまたがる範囲から米良街道を抽出しており、最終上呈版とは地域割りが異なる。「米良街道図」として完結し、完成度の高いものである。



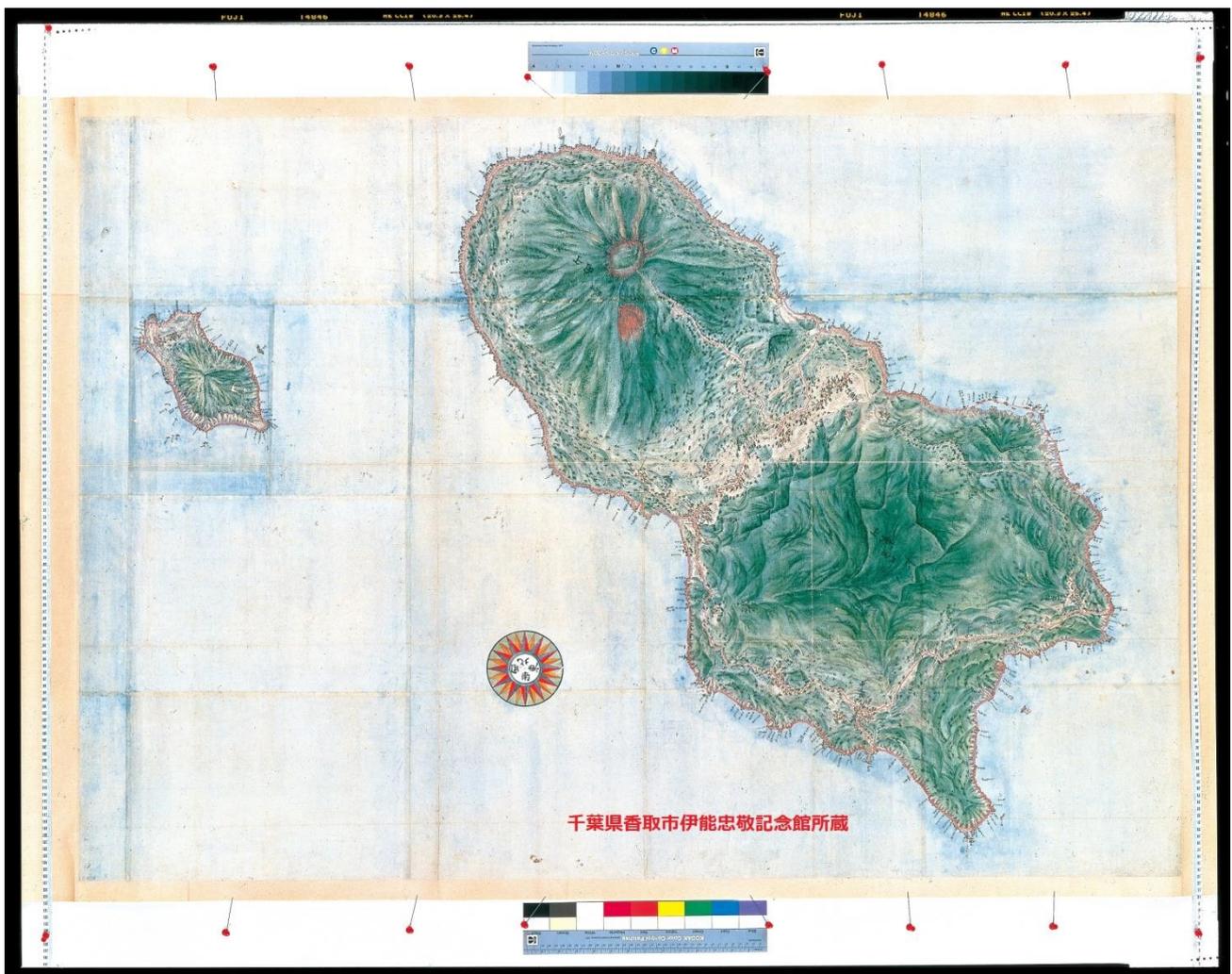
この大図の下図と思われるものが国宝の地図・絵図類 376 番「自肥後国球磨郡七池村至日向国児湯郡南方村下図」である。『伊能忠敬関係資料目録・下図』（伊能忠敬記念館：平成 17 年 以下『目録・下図』と略す）によると、法量 84.2×175.8、縮尺 36000 分の 1 でこの大図と同じである。裏には「肥後国球磨郡人吉より米良通り日向国児湯郡南方村ニ至ル」との墨書があるとのことで、描図範囲も同一である。平台を置くスペースがあるだけに、この下図と大図を並べて見たいところである。

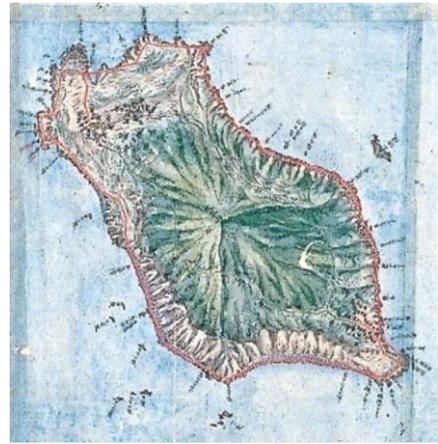
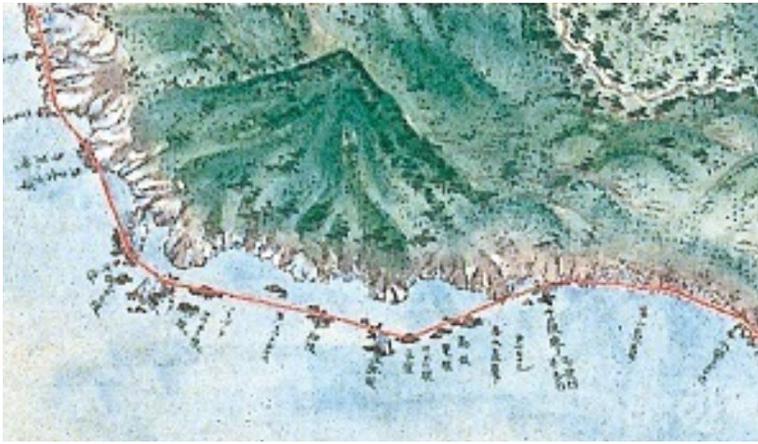
ところで、この下図には「九州街道 三」と朱書されているとのことである。九州地方の大図で現存するものは数少ないが、『目録・下図』によると、伊能忠敬記念館には九州地方の大図サイズの広域下図が 19 鋪残されている。その中には、「九州街道」「九州街道 二」「九州街道 三」「九州街道 六」「九州街道 七」「九州街道 八」「九州街道 九終」「九州海浜 再一」「九州海浜 再二」「九州海浜 再三」などと朱書されたものがあるとのことである。『目録・下図』の各図の記載内容から見ると、19 鋪の広域下図の大半は九州第 1 次測量とは重ならない独自の範囲のようである。もし、九州第 2 次測量だけの広域下図が作られたとすれば、大図はどうなったのだろうか。この米良街道の大図や広域下図群は伊能図全体の中でどのように位置づけるべきなのだろうか。

伊能忠敬記念館HPの「国宝 伊能忠敬関係資料の目録」を見ると、もう一つ九州地方の大図が残されているようである。地図・絵図類第 108 号の『自筑前国御笠郡岡田村至筑後国上妻郡一条村図』である。こちらも気になるところである。

○「伊豆国附八丈島并属小島沿海地図」 文化 13 年 縮尺 12,000 分の 1 163cm×113cm
国宝：地図・絵図類 番号 116

八丈島の内部の未測量地まで山容を描き込んだ、華麗な 1/12,000 の特別大図である。「自肥後国球磨郡七池村至日向国宮崎郡南方村図」は斜め上からの山々の鳥瞰図であるが、この特別大図では山容を真上から見たように描きながら、なお立体感を出している





八丈島本島の部分では、左図のように斜め上からの鳥瞰図的な描写がまだ見られるが、右図の八丈小島では真上から描きながらも、描写力だけで太平山(616.8m)の急峻な山容を描いている。なお、左図では岩礁づたいに測線が延びていることがわかる。

壁面に置かれているため地名などは確認できない。伊能図の絵画的表現の変化がわかればよいというものでもあるまい。平台を置くスペースがあるだけに残念である。

○「自肥後国天草郡中田村至肥後国天草郡魚貫村麓絵図」 国宝：地図・絵図類 番号 540

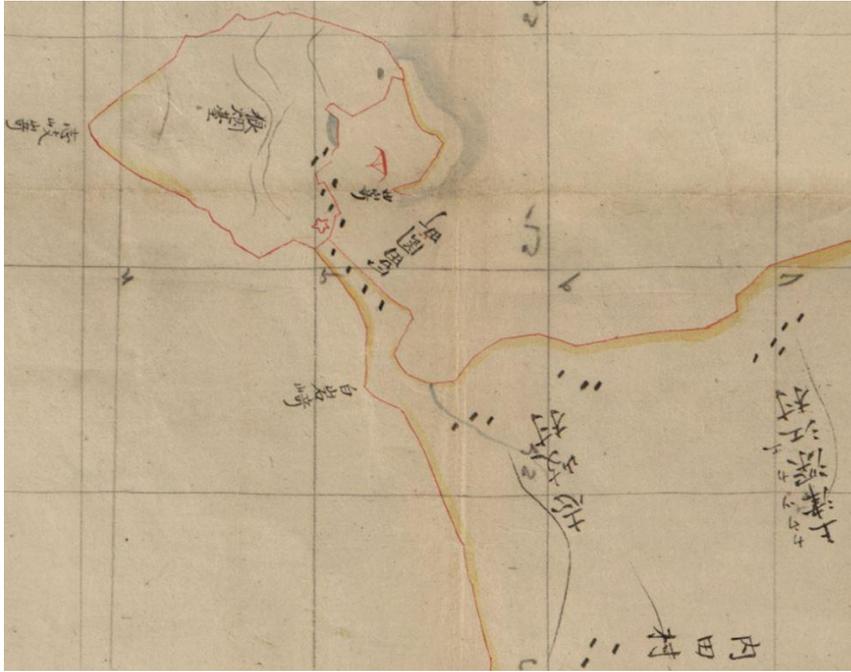


千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

この麓絵図は独特な地形であるため、場所の特定がしやすい。この図の富岡半島は天草下島の北西端の苓北町にあり、細長く突き出た半島は砂州で島とつながった陸繋島として知られている。さらに半島の一方からは、巴崎とも、曲崎ともいう砂嘴が伸びている。参考までにグーグルアース3Dを載せてみた。



『測量日記』によると文政7(1810)年10月8日に坂部支隊が到着した。「曲崎片側測」とあるように、アメリカ議会図書館大図でも砂嘴の西側だけに測線が引かれている。翌9日には富岡半島をぐるっと測量したところに、忠敬本隊も到着して合流した。



アメリカ議会図書館大図第 203 号 [薩摩・長嶋 肥後・天草] より

- 「伊豆国附神津島沿海地図」 国宝：地図・絵図類 番号 122 文化 13 年 縮尺 12,000 分の 1
神津島の大図である。これはケースの手前に置かれているので細部も見ることが出来る。特に緑色の山容に対して朱の測線が太く引かれており、強い印象を与える。
- 「伊豆七島神津島下図」 国宝：地図・絵図類 番号 178 文化 13 年 縮尺 36,000 分の 1、216,000 分の 1
神津島の下図である。縮尺 36,000 分の 1 の神津島の左上に、216,000 分の 1 という異なる縮尺の神津島を記入している。周辺の小島との間に交會法の朱線が確認できる。

(佐原 本川岸 T 生)